２章　大学生の教育満足感と大学生活充実感を高める諸要因

1　はじめに

日本における 4 年制大学への進学率はますます増加している。2009 年の文部科学省の学校基本調査によると、4 年制大学への進学率は 50.2%まで上がっており、進学率が 24.7%だった 20 年前の 1989 年に比べるとその 2 倍を超えている。それに伴って 4 年制大学の学生総数も増加してきた。しかし、近年になってからは少子化の影響によって入学者総数の増加が伸び悩んでおり、数年のうちに大学志願者総数と入学者総数が同じになる全入学の時代に入ると予測されている。また、その影響によって入学定員割れした私立大学数も年々増加しており、2009 年には私立大学のうち 46.5%、私立短期大学のうち 69.1%の大学が入学定員割れとなっている。

このような状況を目の当たりにし、大学側は学生を確保するためのさまざまな改革や新しい取り組みを始めている。その改革として取り上げられるのは、カリキュラム改革、学生による授業評価、厳格な成績評価、学内での優秀学生に対する奨学金制度、単位交換・編入学の推進、自己評価・第 3 者評価などがある（坂本 2005）。

学生を確保するためにこのような新しい取り組みを始める際、その方向の根本とすべき考え方は何だろうか。それは、入学した学生たちに充実した大学生活を送ることができるようにサポートし、学生たちに充実感および満足感を与えるものという考え方であろう。入学志願者が大学を選択する基準は、その卒業生の就職率や大学の研究業績だけではない。入学志願者がその大学での生活に対して抱く期待感も、その重要な基準であるといえる。つまり、学生が大学生活のなかで高い充実感を得ることのできる大学であるほど、入学志願者のもつその大学に対する評価も高まるのである。したがって、これらの大学側のさまざまな取り組みは、それが学生の大学生活への充実感を向上させるものではなければならない。

ところで、このような充実感を与える要因には具体的に何があるだろうか。最初にあげられるのは、大学教育から得られる満足感である。今日、大学で始めている新しい取り組みは、この満足感を向上させるためのものが多い。先に述べたカリキュラムの改革がその代表的な例であろう。しかし、大学生活のなかで学生たちが求めているのは教育だけではない。多くの学生は部活やサークル活動などの授業外活動に参加しており、それらの活動を大学生活の重要な一部分として考えている。したがって、大学内の授業外活動も大学生活への充実感に影響するといえる。

そして、卒業後の進路への満足感も大学生活全般に影響すると考えられる。卒業後の進路は大学生活に直接かかわるものではないが、就職活動が大学生活の中で重要な部分を占めていることや、学生が大学に進学する理由の一つが就職や進学といった将来の進路のためであるため、これを大学生活の充実感を高める要因であると考えても良いだろう。同じく、アルバイトも大学内の活動ではないが、多くの大学生がアルバイトをしているため、大学生活への充実感に影響する要因として考えられる。

そこで、本稿では同志社大学社会学部の卒業生を対象にして 2009 年 3 月に行われた

質問紙調査のデータを用いて、これらのさまざまな要因が大学生活への充実感にどのように影響しているかについて分析していく。

2 方法

同志社大学社会学部は、2009 年 3 月 20 日の卒業式の日に卒業生全員を対象に調査を行った。調査の対象を学科別にみると、社会学科 92 人、社会福祉学科 101 人、メディア学科 92 人、産業関係学科 78 人、教育学科 78 人であり、全体対象者数は 441 人である。そして、当日に回答してもらえなかった卒業生には郵送を通して回答してもらった。こうして得られた有効回答数は 402 人であり、その回収率は 91%である（上記には旧文学部社会学科卒業生を含む)。

分析に用いる変数には、「向上した能力」「教育満足感」「授業内の積極的参加」「授業外の努力」「GPA」「就職満足感」「クラブ・サークル活動」「アルバイトの経験期間」「大学生活充実感」があり、中には既存の変数から作成された合成変数も含まれている。分析の順序は、まず関連の分析に用いる各変数の分布等の基礎統計を確認し、それから変数間の関係を分析していく。

変数間の関係の分析は、教育満足感の因果構造分析と大学生活充実感を高める要因の分析を行う。教育満足感の因果構造の分析にはパス解析を用いる。パス解析とは、変数間のいくつかの因果モデルを仮定し、変数間の相関係数をもとに因果推論を行う方法である（竹内編 1989)。パス解析において因果効果の大きさを示す値をパス係数というが、今回の分析では比較のために標準化したパス係数を使う。標準化したパス係数の場合、-1 から 1 の値をとり、-1 に近いほどマイナスの効果が大きいことになり、1 に近いほどプラスの効果が大きいことになる。そして、値が 0 の場合は因果効果がまったくないことを意味する。さらに、パス解析はある変数が他の変数に影響するとき、その変数が他の変数に直接与える因果効果である「直接効果」と、他の変数を媒介して与える因果効果である「間接効果」を比較することができる。これについても検討しよう。

次に、大学生活満足感を高める要因の分析には重回帰分析を用いる。重回帰分析は、複数の独立変数がある従属変数に与える影響の強さを比較することができる。影響の強さを表す値を回帰係数というが、これには非標準化係数と標準化係数がある。単位が違う変数間の影響を比較するときには、標準化係数の大きさを見ればいい。標準化回帰係数も-1 から 1 の間の値をとり、-1 に近いほどマイナスの影響が強いことを示し、1 に近いほどプラスの影響が強いことを示している。同じく 0 の場合はまったく影響しないことを意味する。

3 教育満足感の因果構造分析

大学教育によって得られる満足感は、大学生活への充実感に影響する最も重要な要因の一つであると考えられる。したがって、この教育満足感を高める要因にはどのようなものがあるかを検討することは、これからのさまざまな大学の新しい取り組みの方向を考えるとき重要になるだろう。したがって、ここでは大学教育への満足感を高める要因

に何があるかを分析していく。

3.1 大学教育への満足感

表 1　大学教育への満足感

	大学教育満足感	度数
満足	17.3	68
どちらかといえば満足	51.0	201
どちらともいえない	25.6	101
どちらかといえば不満	5.6	22
不満	0.5	2
合計	100	394

表 1 の大学教育全般に対する満足感についての質問項目の分布をみると、17.3%の人が「満足」だと回答し、51%の人が「どちらかといえば満足」だと回答している。また「どちらともいえない」は 25.6%、「どちらかといえば不満」は 5.6%、「不満」は 0.5%である。「満足」と「どちらかといえば満足」と回答した人を合わせると 68.3%となり、「どちらかといえば不満」と「不満」と答えた人を合わせると 6.1%となる。全般的に不満感より満足感を感じる傾向が見られているのである。

3.2 授業を通して向上した能力

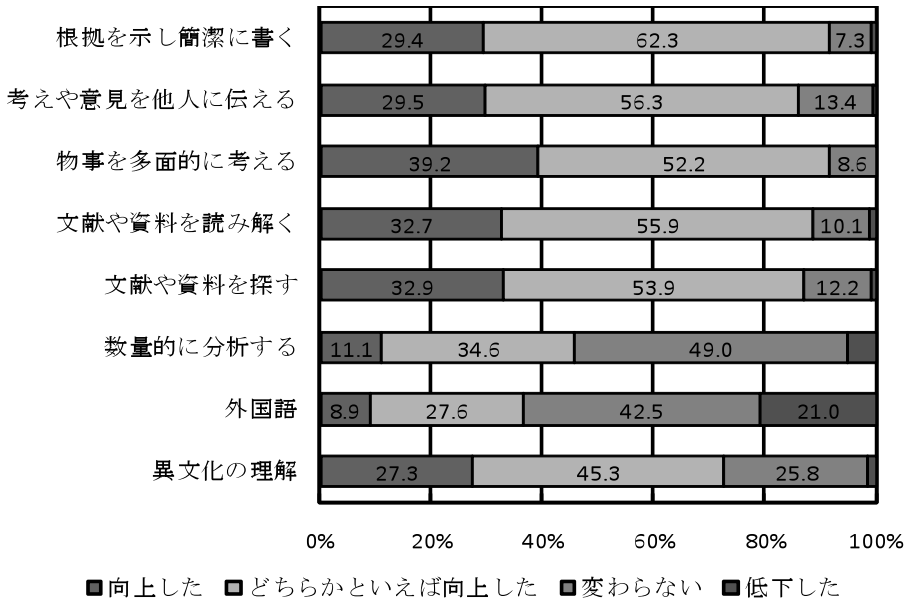

図 1　授業を通して向上した知識や技能

授業を通して感じた「能力の向上感」を表す指標としては８つの変数を用いた。図１はこれらの変数の分布を示したグラフである。最初の 3 つの質問である「根拠を示し簡

潔に書く」「考えや意見を他人に伝える」「物事を多面的に考える」は論理的思考・説明能力の向上感を示す変数と考えられる。そして、「文献や資料を読み解く」「文献や資料を探す」は情報の探索能力を示す変数として、また「数量的に分析する」「外国語」「異文化の理解」は実用的なスキルにかかわる変数として考えることができる[1]。

図 1 をみると、論理的思考・説明能力を表す 3 つの変数と情報探索能力を表す 2 つの変数は 8 割以上の人が向上したと感じていることがわかる。しかし、他の変数では「低下した」と回答した人がほとんどいなかったのに対し、「外国語」の能力の向上感においては 21.0%の人が「低下し」と感じている。また数量的に分析する能力では、「低下した」と回答した人は少ないものの、「向上した」と回答した人が 11.1%とあまり多くない。論理的な思考・説明能力と情報探索能力はほとんどの人が向上したと感じているが、実用的スキルは比較的に向上感を感じていた人が少なくなっている。

3.3 GPA

ここでは、学生が受講していた科目の平均得点である GPA についてみていこう。今回の調査では、GPA について「1.00 未満」「1.00～1.49」「1.50~1.99」「2.00~2.49」「2.5~2.99」「3.00 以上」の 5 つの選択肢を設けて回答してもらったが、選択肢間の得点の範囲が異なるため、それを「3.00 以上」、「2.00～2.99」「1.00～1.99」「1.00 点未満」に直した。図 2 はその結果を学科別に見た分布図である。

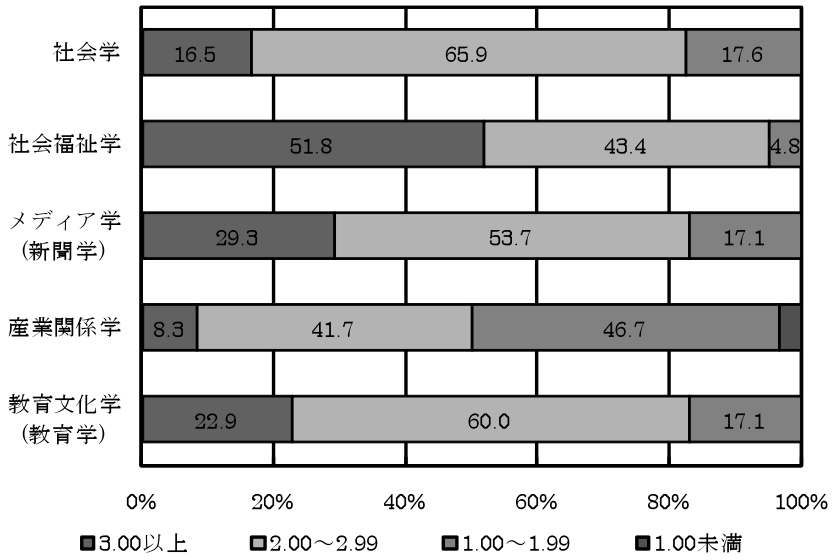

図 2　学科別の GPA

全般的に、学科によって GPA の分布がかなり異なっていることがわかる。特に、社会福祉学科と産業関係学科を比較すると反対の傾向が見られている。社会福祉学科では 51.8%の人が 3 点以上の得点を得ているのに対し、産業関係学科では 8.3%である。逆に、産業関係学科では 2 点未満の得点を取った人が 50%なのに対し、社会福祉学科では 4.8%と少ない。

表 2　学科別 GPA の推定平均

	社会学	社会福祉学	メディア学（新聞学）	産業関係学	教育文化学（教育学）	合計
平均	2.491	2.976	2.634	2.104	2.550	2.578
標準偏差	0.566	0.602	0.695	0.700	0.662	0.694
N	85	83	82	60	70	380

表 2 は、GPA 項目の中の各選択肢の中央値を回答者の GPA と仮定して計算した平均であり、社会学科が 2.491、社会福祉学科が 2.946、メディア学科が 2.634、産業関係学科が 2.104、教育文化学科が 2.550 の GPA 平均を示している。学部全体の平均は 2.578 だった。図 2 の分布でも十分予測できることではあるが、社会福祉学科の GPA 平均得点が最も高く、産業関係学が最も低くなっている。また、社会学科の標準偏差が 0.556 と学科のなかで最も低いことから、GPA の個人差は社会学科が最も少ないことがわかる。

このように学科によって GPA の平均と標準偏差が異なるため、以下の分析では学科ごとの標準得点を用いて分析を行うことにしよう[2]。

3.4 授業への取り組み方

学生の授業に対する取り組みの度合いも教育満足感に影響すると考えられる。ここでは学生の授業への取り組み方についてみていこう。

授業へ取り組み方の指標としては、「授業内容について教員に質問する」「授業中のディスカッションに参加する」「授業の予習や復習をする」「ゼミの発表のために時間をかけて準備する」の 4 つの変数を用いた。選択肢はそれぞれ「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 4 段階となっているが、「あてはまる」を 4 点、「ややあてはまらない」を 3 点、「あまりあてはまらない」を 2 点、「あてはまらない」を 1 点とし、それの学科別平均を表 3 に示した。

表 3　学科別授業への取り組み方の平均

	社会学	社会福祉学	メディア学（新聞学）	産業関係学	教育文化学（教育学）	合計
教員に質問	3.284	3.233	3.345	3.313	3.167	3.269
ディスカッションに参加	3.545	3.756	3.702	3.719	3.764	3.693
授業の予習・復習	2.920	3.056	3.229	3.109	3.139	3.086
ゼミ発表の準備	4.045	4.148	4.202	3.844	4.319	4.119
合計	3.449	3.548	3.620	3.496	3.597	3.542

学部全体の平均をみると、「授業内容について教員に質問した」が 3.269、「授業中のディスカッションに参加する」が 3.693、「授業の予習や復習をする」が 3.086、「ゼミの発表のために時間をかけて準備する」が 4.119 であり、ゼミ発表の準備の得点が最も高くなっている。また、変数ごとの学科別の平均においては大きい平均の差は見られな

かった。

表 4　授業への取り組み方の主成分分析

	I	II	共通性
教員に質問	0.871	0.156	0.783
ディスカッションに参加	0.823	0.211	0.722
ゼミ発表の準備	0.074	0.894	0.805
授業の予習・復習	0.346	0.671	0.570
寄与率	39.0	33.0	
累積寄与率	39.0	72.0	
固有値	1.561	1.319	

因子抽出法: 主成分分析
回転法: Kaiser の正規化を伴うﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法

これらの変数をまとめるために主成分分析を行ってみよう。分析の結果は表 4 に示されている。まず「授業内容について教員に質問をする」と「授業中のディスカッションに参加する」と高い因子負荷量[3]を示している第 1 主成分の得点を「授業内の積極的な参加」としよう。そして「ゼミの発表のために時間をかけて準備する」「授業の予習や復習をする」と高い因子負荷量を示している第 2 主成分の得点は「授業外の努力」としよう。また、主成分の解釈をしやすくするためにバリマックス回転を行っているため、新しく構成された「授業内の積極的な参加」「授業外の努力」の相関は 0 となる。

3.5　教育満足感の因果構造

これまで、教育満足感を規定する要因として「GPA」「能力の向上感」「授業内の積極的参加」「授業外の努力」4 つ変数をみてきた。ここでは、まずパス解析のモデルを作るために変数間の因果関係を検討していこう。

満足感が得られることができるのは、大きく 2 つ場合があると考えられる。第 1 の場合は、ある行動の結果が元の期待の通りに得られたり、その期待以上の結果が得られたりした時に感じられる満足感である。第 2 の場合は、結果の如何にかかわらず、行った行動それ自体から得られる満足感である。要するに、満足感には行動そのものから得られるものと結果から得られるものがあるのである。さらに、結果は目的を持った何らかの行動によって得られるため、第 1 の満足感の因果関係を「行動→結果→満足感」と考えることができる。そして、第 2 の満足感の因果関係は「行動→満足感」と考えることができる。

今回の分析で用いる変数の中でこの「行動」に当たる変数には、「授業内の積極的参加」「授業外の努力」がある。そして、「結果」に当たる変数には「GPA」「能力の向上感」がある。ところで「能力の向上感」は実際に目にはっきり見える結果ではなく、あくまでも個人の認識である。しかし、そもそもいかなる結果でも、その結果に対する自己の認識がなければ満足感にはつながらないため、「能力の向上感」を「教育満足感」の原因として見なして問題はないだろう。

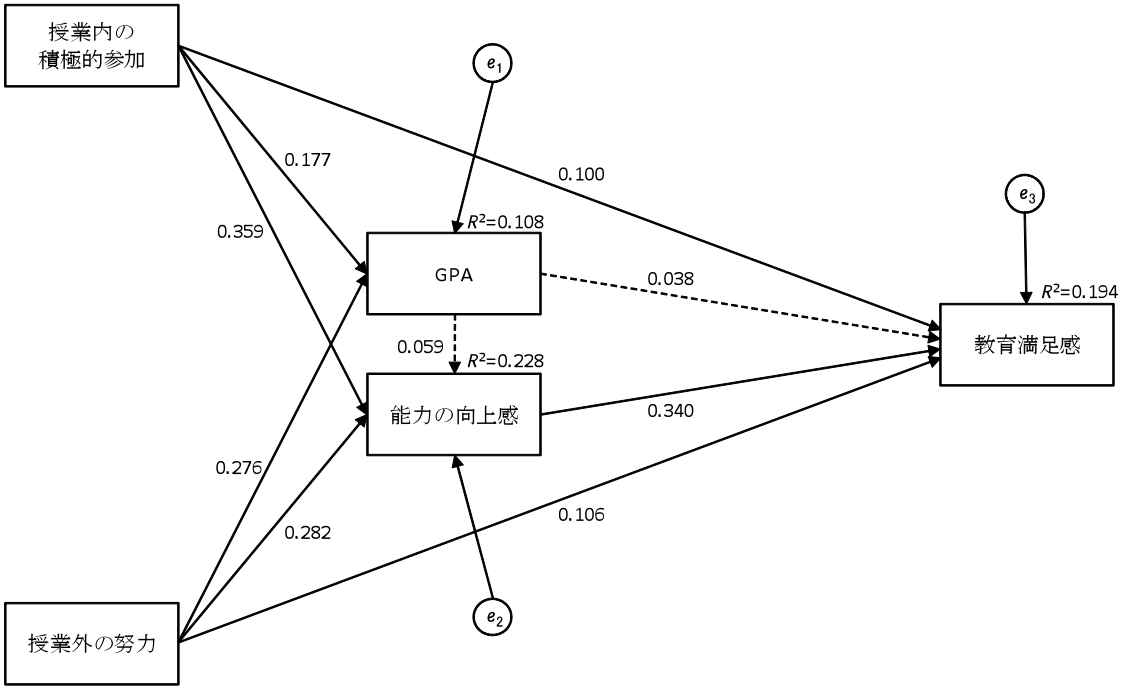

図 3　教育満足感の因果モデル（標準化解）

図 3 は先に検討した因果関係をもとにしてモデルを作り、パス解析を行った結果を示したものである。矢印は因果効果の方向を示している。直線の矢印は母集団推定検定のとき有意だったものであり、点線の矢印は有意ではなかったものである[4]。そして、矢印の上の値は因果効果の強さを示すパス係数である。

図 3 をみると、「GPA」から「教育満足感」へのパス係数は 0.038、「能力の向上感」からの「教育満足感」へのパス係数は 0.340 となっており、「GPA」よりも「能力の向上感」による効果が非常に強くなっている。そして、「授業内の積極的参加」と「授業外の努力」から「GPA」へのパス係数は、それぞれ 0.177、0.276 であり、「授業外の努力」の効果の方が強くなっている。「能力の向上感」への効果においては「授業内の積極的参加」が 0.359、「授業外の努力」が 0.282 であり「授業内の積極的参加」の効果が強い。

表 5　教育満足感に対する総合効果

	直接効果	間接効果			総合効果
		→GPA	→能力の向上感	→その他	
授業内の積極的参加	0.100	0.007	0.122	0.004	0.233
授業外の努力	0.106	0.010	0.096	0.005	0.217

表 5 は、「授業内の積極的参加」と「授業外の努力」から「教育満足感」への因果効果を直接効果と間接効果に分けて示したものである。結果をみると、「授業内の積極的参加」から「教育満足感」の因果効果は、直接効果が 0.100、「GPA」を通じての間接効果が 0.007、「能力の向上」を通じての間接効果が 0.122 となっている。そして、「授

業外の努力」から「教育満足感」への因果効果は、直接効果が 0.106、GPA からの間接効果が 0.010、「能力の向上」からの間接効果が 0.096 となっている。どちらの取り組みにおいても、間接効果は「GPA」よりも「能力の向上」を通る場合が強い傾向にある。なかでも「授業内の積極関参加」が「能力の向上」を通じて与える間接効果は、それの直接効果より強い効果を示している。授業への取り組みの関するこの 2 つの変数からの「教育満足感」への因果効果の中で、「授業内の積極的参加」が「能力の向上感」を通して与える効果が最も強いのである。

4 大学生活への満足感を高める要因

これまでは、教育への満足感の因果構造について分析を行った。ここからは、教育満足感を含め、大学生活への充実感を高める要因を分析していく。「教育満足感」の以外に、大学生活満足感に影響する要因としては「サークル・クラブ活動」「アルバイトの経験期間」「就職満足感」の 3 つの変数を用いる。

4.1 大学生活への充実感

表 6　大学生活への充実感

	学生生活充実感	N
充実していた	57.3	227
どちらかといえば充実していた	29.8	118
どちらともいえない	9.6	38
どちらかといえば充実していなかった	2.3	9
充実していなかった	1.0	4
合計	100	396

まず、大学生活への充実感の分布からみておこう。表 6 は「あなたの大学生活は充実していましたか」の回答の分布を示したものであるが、「充実していた」が 57.3%、「どちらかといえば充実していた」が 29.8%となっており、合わせて 87.1%の人が充実していたと感じていた。また、「どちらかといえば充実していなかった」と「充実していなかった」を合わせると 3.3%となり、充実感をあまり感じなかった人も少ないことがわかる。

4.2 サークル・部活動の頻度

今回の調査で、大学内の授業外活動に関して問うた質問項目には「サークル・同好会」の活動頻度と「体育会・クラブ」の活動頻度がある。表 7 は、この 2 つの変数の回答のクロス表である。結果をみると、「サークル・同好会」活動に対して「よくした」と「少しはした」と回答した人は、385 人のうち 255 人であり、「体育会・クラブ」の活動に対して「よくした」と「少しはした」と回答した人は 79 人である。

表 7　サークル・同好会と体育会・クラブのクロス表

		サークル・同好会			合計
		よくした	少しはした	しなかった	
体育会・クラブ	よくした	7	6	45	58
	少しはした	5	8	8	21
	しなかった	141	88	77	306
合計		153	102	130	385
両方に参加していた		26			
片方だけ参加していた		282			
どちらにも参加しなかった		77			

さらに、このクロス表の結果をまとめると、どちらの活動にも参加していた人は 26 人、片方の活動だけに参加していた人は 282 人、どちらの活動にも参加しなかった人は 77 人となる。この結果を百分率で考えると、全体の 80%が何らかの授業外活動に参加していたことになる。ただし、両方の活動に参加した人はあまりいないため、たいていの学生は 1 つ程度の授業外活動に参加していたことがわかる。関連性の分析では、この二つの変数から作成した「サークル・クラブ活動の頻度」という合成変数を用いることにする。

4.3　アルバイトの経験期間

今回の調査の中でアルバイトに関して問うた質問には、「在学中にアルバイトをしていた期間は、合計で 2 年以上になる」「同じアルバイト先で 1 年以上働いた」「接客・販売の仕事を 1 年以上経験した」「運送・軽作業の仕事を一年以上経験した」「塾講師や家庭教師の仕事を 1 年以上経験した」の 5 つがあった。これらの質問項目に基づいて「アルバイト経験期間」と「1 年以上したアルバイトの職種」という変数を新しく作成し、表 8 と表 9 にそれぞれの分布を示した。

表 8　アルバイトの経験期間

	アルバイトの経験期間	度数
2年以上	82.6	317
一年以上	5.2	20
一年以上の経験なし	12.2	47
合計	100	384

表 8 をみると、2 年以上アルバイトをした人が 82.6%、1 年以上した人が 5.2%、一年以上のアルバイト経験がない人が 12.2%である。1 年以上の経験がない人が 12.2%であるため、まったくアルバイトの経験がなかった人はそれよりも少ないはずである。おそらく、まったくアルバイトの経験がない人はほとんどいないだろう。

表 9　アルバイトの経験期間とアルバイトの職種のクロス表

	1年以上した アルバイトの職種	度数
接客・販売	57.9	195
運送・軽作業	2.1	7
塾講師・家庭講師	13.6	46
その他	7.4	25
2つ以上	19.0	64
合計	100.0	337

次に、表 9 のアルバイトの職種をみると「接客・販売」が 57.9%、「運送・軽作業」が 2.1%、「塾講師・家庭教師」が 13.6%である。1 年以上アルバイトのした人の半数以上が接客や販売の仕事に携わっていたのである。そして、2 つ以上の職種に携わった人も 19.0%とかなりの割合を占めている。

4.4　卒業後の進路への満足感

表 10　卒業後の進路への満足感

	進路満足感	N
満足	52.1	207
どちらかといえば満足	29.5	117
どちらともいえない	12.8	51
どちらかといえば不満	3.0	12
不満	2.5	10
合計	100.0	397

表 10 の「卒業後の進路満足感」の分布をみると、「満足」が 52.1%「どちらかといえば満足」29.5%であり、全体の 81.6%の人が進路への満足感を感じている。不満を感じていた人は「どちらかといえば不満」が 3.0%「不満」が 2.5%であり、合わせて 5.5%とかなり少なく、ほとんどの人が満足感を感じていることがわかる。

4.5　大学生活充実感を高める要因

ここでは、「教育満足感」「サークル・部活動の頻度」「アルバイトの経験期間」「卒業後の進路満足感」が、「大学生活充実感」にどれほど影響しているかを検討するために重回帰分析を行う。重回帰分析の結果は、表 11 に示されている。結果をみると、「教育満足感」の標準化係数が 0.269、「卒業後の進路満足感」の標準化係数が 0.308 となっており、大学教育への満足感より、むしろ就職や進学への満足感が大学生活の充実感に影響している。また、「サークル・クラブ活動の頻度」の標準化係数は 0.247 であり、大学生活充実感に大きい影響を与えている。アルバイトの経験期間からの影響は 0.009

と最も小いため、アルバイトをすることが大学生活の充実感には、あまりつながらないことがわかる。

表 11　大学生活への充実感の重回帰分析

	非標準化係数	標準誤差	標準化係数	t	p
(定数)	1.044	0.315		3.309	0.001
教育満足度	0.280	0.048	0.269	5.891	0.000
進路満足感	0.270	0.040	0.308	6.739	0.000
サークル・クラブ活動の頻度	0.241	0.044	0.247	5.433	0.000
アルバイトの経験期間	0.112	0.057	0.090	1.974	0.049
決定係数	0.263				
p	0				
度数	363				

5　考察

5.1　教育満足感について

これまで、教育満足感の因果構造を分析し、教育満足感と就職満足感、サークル・クラブ活動の頻度、アルバイトの経験期間が大学生活への充実感をどれほど高めるかを分析してきた。

教育満足感の因果構造の分析では、学生の取り組みそれ自体が教育満足感を高める傾向はあまり見られなかった。学生の取り組みは、その取り組みを通して学生が何かの能力が向上したと感じるときにより満足感を高めるのである。また GPA があまり教育満足感を高められなかったのは、学生たちが授業で求めていることが、高い成績を得ることではなく、授業を通じて論理的な思考の能力や実用的な技能を高めることであるからだろう。

そして、授業の時間外に授業のために授業の準備をしたり、授業の予習・復習をしたりする方より、実際の授業の中で積極的な参加をした方が、能力の向上感が高まる。授業内の積極的な参加は、教員等の他人によって行われるのではなく、学生が自主的に行う取り組みであり、授業外の努力はどちらかといえば他人に指示されて行われる他律的な取り組みに近いものである。したがって、教育満足感は学生がより自主的に授業に参加することができたとき高まるといえる。しかし、大学全体の授業の中で学生が自主的に授業に参加できるような授業はゼミや実習以外にはあまりなく、多くの授業は講義形式で行われている。学生の教育への満足感を高めるためには、学生の積極的な参加を促すことができる授業をより充実させる必要があるだろう。

5.2　大学生活への充実感について

大学生活への充実感への影響が最も大きい要因は卒業後の進路への満足感だった。これはかなり意外な結果である。なぜなら、就職や進学などの卒業後の進路は、実際の大学生活によって得られる結果とは言いがたいからである。どんなに充実した大学生活を送っていた学生でも、自分が望んでいた就職先や進学先に進むことに失敗することはよ

くあることである。それなのにこのような結果が出たのは、おそらく多くの大学生が就職や進学の結果を大学生活によって得られた一つの結果として見なしているからだろう。ただし、今回の調査の回答は学生の社会進出や進学への期待感が最も高い日ともいえる卒業式の日を中心に行われたため、分析の結果がやや偏っている可能性もある。

また、サークル活動やクラブ活動などの大学内で行われる授業外活動への参加も、大学生活への充実感を高める重要な要因であることが明らかになった。この結果は、金沢大学文学系の学部生を対象にして行った調査でも同じ傾向が見られている（國眼・松下・苗田 2005）。多くの大学が始めている取り組みのほとんどは、授業にかかわるものであり、授業外活動をより充実させるための取り組みはあまりない。学生の大学生活への充実感を高めるためには、授業外活動の環境もより充実させる必要があるだろう。

表 12　サークル・部活動別にみた GPA の平均

	GPA	N	標準偏差
どちらも活動した	2.490	25	0.623
片方だけ活動した	2.590	266	0.697
どちらも活動しなかった	2.497	74	0.703

ところで、一般的に授業外活動への参加は学生の教育への関心を弱め、成績を低下させると思われている。ところが、「サークル・部活動」の頻度別にみた GPA の平均を示した表 12 をみると、授業外活動が必ずしも成績を低下させる要因ではないことがわかる。むしろ授業外活動にまったく参加しなかった人の GPA が片方だけ活動した場合よりも低いのである。適切な程度の授業外活動は、学生の学業成績を高める効果があるのである。

6　おわりに

本稿では、まず教育満足感が得られる因果構造を分析し、次に教育満足感とそれ以外の諸要因が大学生活への充実感をどれほど高めているかについて分析を行ってきた。分析から得られた結果の中で、重要なものとして取り上げられるのは以下の 4 つである。

①学生の授業への取り組みは、それだけではあまり教育満足感の向上をもたらさないが、学生の取り組みが能力の向上感を高めることができるとき、教育満足感を大きく高めることができる。
②授業への取り組み方は、授業内の積極的な参加と授業外の努力に分けられるが、能力の向上感は授業外の努力よりも授業内の積極的な参加によって高まる。
③大学生活への充実感は、実際の大学生活とは直接関係しない卒業後の進路に対する個人の満足感によって最も高まる傾向がある。
④教育への満足感だけではなく、大学内の授業外活動も大学生活への充実感を高める重要な要因の一つである。

最後に、本稿の分析の限界について少し述べておきたい。本稿で用いた調査のデータは、同志社大学社会学部の卒業生だけを対象にして行ったものであるため、ここで得られた諸要因間の関連を日本の 4 年制大学全体に一般化することはできない。さらに、現在大学を通っている学生ではなく、卒業生を対象にしているため、分析の結果が現在大学を通っている人々を対象にした場合と異なる可能性がある。このような限界を踏まえて、ここで得られた関連性が日本の 4 年制大学にまで一般化できるかについて検討することが、これからの課題である。

［参考文献］

星野敦子・牟田博光, 2005, 「大学の授業における諸要因の相互作用と授業満足感の因果関係」『日本教育工学会論文誌』29(4): 463-473.

國眼眞理子・松下美智子・苗田敏美, 2005, 「文系学部生の大学生活満足感・充実感と職業イメージとの関連: キャリア支援のための予備的検討」『金沢大学大学教育開放センター紀要』25, 69-84.

文部科学省, 平成 21 年度学校基本調査速報, (http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08121201/1282646.htm).

坂本幸一, 2005, 第 6 章「少子化と私学経営の課題」『少子化・高齢者とその対策 総合調査報告書』国会図書館 調査資料, 103-115, (http://www.ndl.go.jp/jp/data/publication/document2005.html, 2009.8.15).

竹内啓編, 1989, 『統計学辞典』東洋経済新聞社.

---

1 「異文化の理解」は、それだけでは実用的なスキルだとはいえない。しかし、これらの変数を因子分析にかけると「異文化の理解」は「外国語」が同じ因子に高い因子負荷量を示している。したがって、ここでは「異文化の理解」を実用的なスキルを表す変数と見なした。

2 標準得点は Z 得点とも言われているが、元の観測値から平均を引き、標準偏差で割ることで求められる。

3 因子負荷量は、分析によって構成された主成分と、そのもととなる変数との相関を表したものである。

4 そもそも分析に用いたデータがランダム・サンプリングによって得られたものではないため、母集団を推定する必要はないが、参考のために示しておく。

（２章担当：金政芸、教育ＧＰアカデミックアドバイザー、博士前期課程）